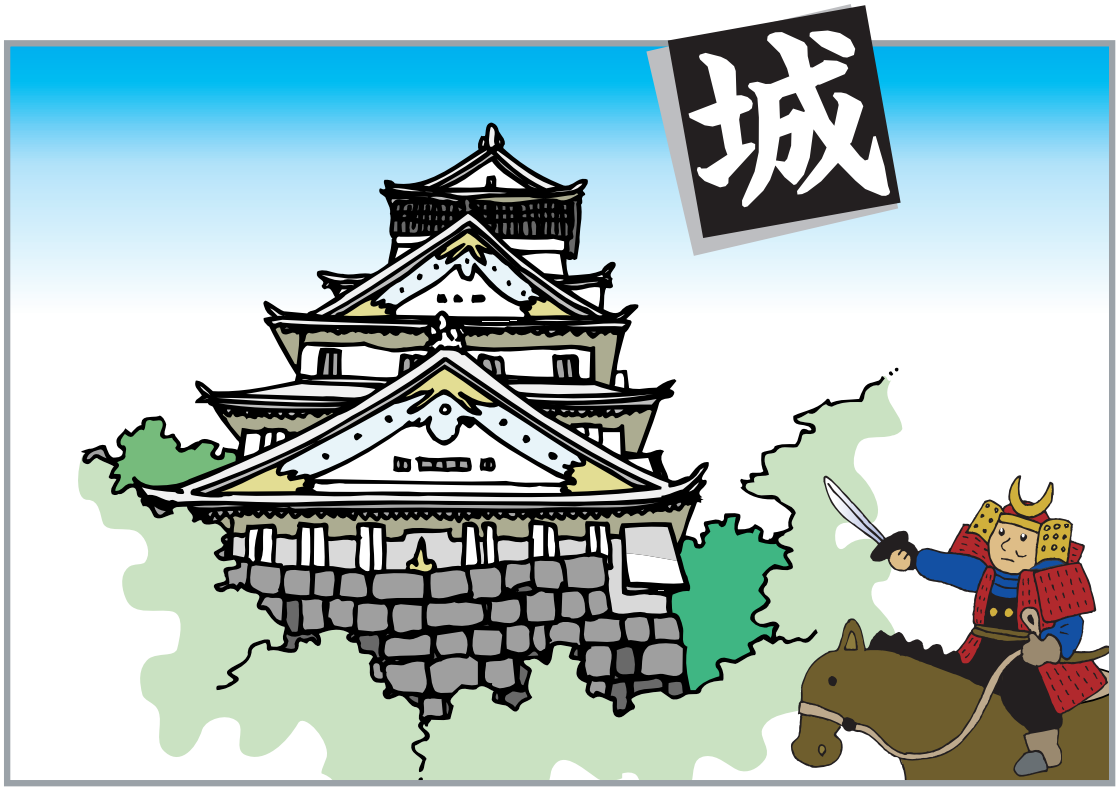
平成20年度 講座「丹波学」

もう一度学びたい丹波の城

～秘められた城主・人物伝～



丹波篠山
築城四〇〇年祭

(財)兵庫丹波の森協会 丹波の森公苑

平成20年度講座「丹波学」

写真でふりかえる8月9日(土)から10月18日(土)までの軌跡

8月9日(土)開講式 受付のようす

開講式 林次長挨拶

講座で使った
冊子、看板

開講式終了後、第一回講義がスタート

8月30日(土) 第二回講義での質疑応答

9月6日(土) 第三回講義のようす

9月27日(土) 第四回講義のようす

10月18日（土）　現地学習「丹波の城をめぐる～篠山城跡と八上城跡～」

9時40分篠山城跡へバスで到着

午前中は篠山城跡で中西先生の説明を聴きました

12時50分から八上城跡目ざし登頂中

八上城跡で中西先生の説明を聴く受講生たち

4時前に無事に全員下山し、中西先生の
この日最後の説明を聴きました

秋晴れの中、昼食も
楽しみの一つでした

当日は晴天に恵まれ、快適な１日でした。子どもの頃、一気に駆け登った高城山も当日は一気というわけにはいきませんでしたが、頂上まで登った参加者の顔には満足感があふれていました。沢山の土産話をもって帰路につきました。

目　　次

１　講座「丹波学」の開講にあたって　……１

２　丹波の城と城主群像　……４
　　丹波の赤鬼－荻野直正－

３　丹波波多野氏と八上城　……８

４　織田一族と柏原陣屋　……１４

５　松平・青山氏と篠山城　……２０

６　丹波の城をめぐる　……２６
　　～篠山城跡と八上城跡～

７　講師プロフィール　……３１

８　編集後記　……３２

講座「丹波学」の開講にあたって

１　丹波の森構想（丹波の森づくり）

兵庫県丹波地域は、県の中東部に位置する森の国です。篠山市と丹波市からなり、阪神大都市圏から 50～70 ㎞の近郊にありながら、森林面積が約 75％を占め、豊かな自然や田園景観が残され、心のふるさとというべき大きな価値を持つ地域です。また、播磨、京都、大阪、日本海側からの街道が交差し、加古川、武庫川、そして、由良川の源流をなすことから様々な文化が入り交ざり、まさに文化の十字路として独特な文化を育んできました。

近年の社会情勢の変化はこの豊かな丹波の姿を急速に変えてきました。同時にそこに住む人々の心にも大きな変化を与えてきました。

こうした急激な社会変化に直面した現在こそ、新しい時代に向けて積極的に丹波の環境創造を進める丹波人の育成が必要になってきています。

このような状況で、かけがえのない美しい自然空間や、人々の営み、生活空間、生活文化、地域内外の人々の交流などを含め、「丹波の森づくり」を丹波をあげて取り組んでいます。この「丹波の森づくり」のベースになっているのが、人と自然と文化の調和した地域づくりを目指す「丹波の森宣言」です。

２　講座「丹波学」の開設

丹波の森公苑は、丹波の森づくりの拠点であるとともに、生活創造活動に必要な基本的な考えを提供し、共に考え実践する場を創造するところでもあります。

講座「丹波学」は「丹波の森宣言」の中で提起された「丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育てます。」という提言を主題として平成８年度から開設しています。

本講座は、単なる郷土史等の講座ではなく、丹波地域の伝統、文化、歴史、風俗、人物、地理、言語などを総合的に研究する地域づくりを目指す地域学です。

３　平成２０年度講座「丹波学」のテーマ

今回のテーマは、「**もう一度学びたい丹波の城～秘められた城主・人物伝**」としました。丹波には、確認されているだけで 186 の城跡があります。一般に城は天守があるかどうか以外、あまり関心がもたれない存在ですが、城は軍事的な存在でもありました。平成１５年度に、「城から見た丹波の森」をテーマにした講座を実施しましたが、今回は城を単に抜け殻の史跡としてではなく、かつて城主たちが自らの生命を賭け、夢を託した存在としてアプローチしてみました。また、好評をいただいております現地学習「丹波を歩く」では、篠山城跡と八上城跡へ赴き学習しました。

丹波の森宣言

丹波の自然と文化は、現在及び将来にわたる住民共有の財産であって、これを維持発展させることは私たちに課せられた重大な責務です。

今、私たちはこの責務を強く自覚し、お互いに力を合わせ、自然や文化を大切にしながら、これらを生かした「丹波の森」づくりを次のように進めることを宣言します。

1　丹波の健全な発展をそこなうような自然破壊は行わず、森を大切に守り育てます。

2　丹波の自然景観を大切にし、花と緑の美しい地域づくりを進めます。

3　丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育てます。

4　丹波の素朴さと人情を大切にし、安らぎと活力に満ちた地域づくりを進めます。

４　講座内容

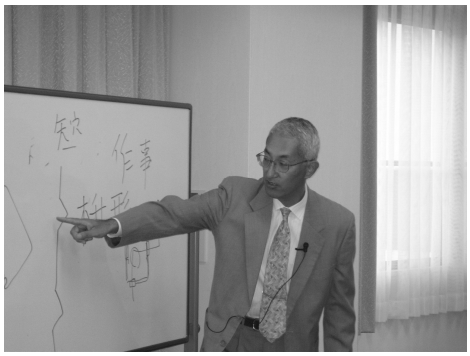
■　テーマ　　もう一度学びたい丹波の城～秘められた城主・人物伝～

■　期　間　　平成 20 年 8 月 9 日（土）～10 月 18 日（土）

■　場　所　　丹波の森公苑　多目的ルーム、柏原公民館、篠山市

■　日　程

開催日	時間	学習テーマ
8月 9日(土)	13:00 13:30	受付 開講式・オリエンテーション
	14:00～ 16:30	**丹波の城と城主群像　丹波の赤鬼－荻野直正－** 丹波市立植野記念美術館 芦田　岩男　氏
8月30日(土)	14:00～ 16:00	**丹波波多野氏と八上城** 城郭談話会 福島　克彦　氏

9月 6日(土)	14:00～ 16:00	**織田一族と柏原陣屋** 丹波市教育委員会 高雄　由紀子　氏
9月27日(土)	14:00～ 16:00	**松平・青山氏と篠山城** 兵庫県立考古博物館 山上　雅弘　氏 
10月18日(土)	9:00～ 17:00	**丹波の城をめぐる　～篠山城跡と八上城跡～** 高槻市立しろあと歴史館 中西　裕樹　氏

丹波の城と城主群像

丹波の赤鬼―荻野直正―

丹波市立植野記念美術館　　芦田　岩男

１ はじめに

和銅６年（７１３）に丹後国が、丹波国から分立して以来、丹波は山国となった。そのために、王城の地京都の隣国にもかかわらず、草深い山々や谷々が延々と続いている遠国の地のような印象を都人に与えていた。

鎌倉時代の承久３年（１２２１）、後鳥羽上皇が鎌倉幕府に倒幕の兵を挙げて敗れた承久の乱が起きると西国地域の監視を強化するために、関東から久下氏、中沢（長沢）氏などがこの丹波に赴任してきたという。

久下氏は、武蔵国大里郡久下郷（現埼玉県熊谷市）から興った武蔵七党のうちの私市（きさいち）党に属していた一族で、承久の乱の功で栗作郷（現丹波市山南町）の地頭職を補任（ぶにん）されて丹波に土着したという。中沢（長沢）氏も、武蔵国那珂郡（現埼玉県児玉郡）の出身といわれ、東寺領の大山荘（現篠山市大山地区）に地頭職を得て丹波に拠を構えるようになった。

また、足立氏も武蔵国足立郡（現埼玉県桶川市・東京都足立区域）出身の武士で、鎌倉時代の承元３年（１２０９）に足立遠政が佐治郷の地頭職として移住したと伝える。

それぞれの郷・荘域にある山城などを本拠として、一族の繁栄と勢力の拡大を図った。すなわち、久下氏は玉巻城、中沢（長沢）氏は大山城、足立氏は山垣城を築きその本拠とした。

その後、それ以外の土着の土豪たちもそれぞれの山々に山城を築き、谷々や要害の地に館を構え小規模ながら群雄割拠を呈していた。

さて、南北朝期の京都争奪戦で南朝方に敗れた足利尊氏・義詮父子は、観応２年（１３５１）１月、与党久下一族の本拠地栗作郷に落ち延びて久下氏を頼った。こうして、足利親子に頼られるほど一時期の久下一族の勢力は目を見張るものがあった。『久下文書』には、この時に父子を迎えて玉巻に御座所と御門を建てて厚遇したと伝えているが、『太平記』には井原石龕（石龕寺城下）に逗留したと記していて、京都から追われたとはいえ幕府の将軍を迎え入れるまでの一大勢力を誇った。

２　赤井一族と波多野氏の勃興

元亀元年（１５７０）３月、織田信長から丹波奥三郡（氷上・天田・何鹿郡）の領有を認められた赤井氏の発祥の地は、信濃国井上から起こったとしている。つまり、赤井は井上又は芦田氏から分かれたと系図に記している。その井上（芦田）家光が丹波国に移り住みついだのが、芦田荘（芦田地区）一帯である。

そして、芦田為家の代になると氷上町南部地域の新郷に移住して、赤井姓を名乗ったという。これは、建保３年（１２１５）ごろのことという（『寛政重修諸家譜』赤井系図）。

しかし、赤井一族のことが良質の史料で確認されるのは、後年の室町時代の中期になってからである。永正１７年（１５２０）３月に、赤井兵衛太夫（忠家か）が禁裏御料であった栗作郷（丹波市山南町小川地区）を違乱・押領しているのが確認される。これが、赤井氏の史料的初見である（『守光公記』）。その頃は、当時室町幕府の管領であった細川高国の被官となっていた。

赤井氏は、氷上郡内において、明応年間（１４９２～１５０１）ごろ以降より衰退の一途を辿っていた久下氏が支配していた荘園を中心に蚕食し、前述した栗作郷の他に、小椋荘（現丹波市柏原町上小倉・下小倉）を赤井時家が被官の本庄彦五郎に命じて半済分を押領し（『久下文書』）、春日部荘（現丹波市春日町）においても天文５年（１５３６）赤井時家が違乱を幕府から糾明されている（『宝鏡寺文書』。

こうして、次第に勢力を拡大しつつ、幕府の管領であった細川高国や晴元の有力な被官となっていた。

これは、多紀郡八上城を本拠とする波多野氏と同様である。

丹波の波多野氏は、文明１７年（１４８５）に初めて史料上にあらわれるが、その時には波多野清秀が多紀郡代の地位にあり、この頃、波多野氏がほぼ多紀郡一円を統括して相当な勢力を扶植していたことを物語っている。そのことは、『土佐文書』によって確認されている。波多野氏の出自については、これまで諸説があったが「波多野茂林居士（清秀）肖像」の賛文『幻雲文集』にあるように、室町幕府の管領となった細川勝元に従って波多野清秀が石見国（現島根県）から上洛した。さらに、応仁の乱の戦功などによって細川政元（管領・丹波守護）から丹波国多紀郡を与えられたというのが、今日の定説となっている。

さらに、波多野元清は八上城を本拠として、細川高国（管領・丹波守護）政権に与動し、周辺地域への勢力拡大を果して地域支配を確立した。

また、波多野秀忠の時代の天文年間（１５３２～５４）には、丹波守護代の内藤氏が拠る八木城を攻略して、船井郡、桑田郡にも勢力を伸ばし、ついに丹波守護代にもなった。この時期が、波多野氏の全盛期でもあった。その一方で、秀忠は京都九条に屋敷地を買い取って居住するということも記録に残っていて、管領で丹波守護の細川晴元の側近として在京していた。

こうして、八上城は波多野氏の拠点的な城郭となり、その勢力拡大とともに次第に規模を拡大していったものと推定される。しかし、波多野元秀の代になると一族の離反や三好長慶勢力との抗争で一時的に八上城を追われる身となるなど、衰退時期ともなった。

３ 明智光秀の丹波攻略戦

さて、元亀元年（１５７０）１１月、波多野秀治は天下布武をめざす織田信長に対して馬と太刀を贈って、友好関係を築いた。しかし、織田信長に反抗した黒井城の荻野直正を討伐するために丹波へ派遣された明智光秀に当初加担した秀治であったが、突如天正４年（１５７６）１月になって違背し荻野直正に味方して光秀軍を襲いこれを敗走させた。

このことから、天正６年（１５７８）３月頃から天正７年（１５７９）６月１日まで、八上城は織田勢明智軍の攻撃対象となり長期にわたる籠城戦が展開されたことは、周知の事実である。最終的に八上城内は極度の飢餓状態となり、波多野秀治ら兄弟三人は光秀方に捕われて縄をかけられ馬に乗せられ、京都を通って安土へ送られた。信長の命によって安土城下の慈恩寺で三人は処刑されて、波多野氏と戦国城郭八上城の

歴史は幕を閉じた。

そして、前年に荻野直正という稀代の戦国武将を病死で失っていた赤井一族も同年８月９日に黒井城が落城、８月２４日に高見城も落城した。最後に残党が立て籠もった国領城（三尾城）も９月２３日に殲滅され丹波は織田信長の支配下に置かれた。

こうして、丹波国は大・小有力な土豪や国人が割拠し、最終的には織田政権によって攻略されたが、中世から戦国時代の山城や遺跡が多く歴史ロマンを感じるところでもある。

４ 丹波の赤鬼―荻野直正―

この武将ほど丹波の戦国期を通じて英雄化・偶像化されている人物は少ない。まさに連戦連勝。生涯で一度も負け戦がない、と『赤井先祖細記』は伝える。この記録から戦歴を列記すると（１）９歳の時に家老分の者を不届きにより手打ちにする。２）１３歳の時に野山砦を守り、内藤修理に勝利する。（３）１６歳の時に再度内藤が黒井城へ攻めるが撃退する。（４）１８歳の時には再々度内藤が黒井城へ攻めるが撃退し、敵８・９人弓で射る、太刀で５・６人を討ち取る。（５）２１歳の時に伯父と合戦して七ヶ所手負いするが、伯父を打つ。（６）竹田という所で、与力３６人が逆心したので成敗した。（７）明智光秀が黒井城へ攻めるが撃退した。すなわち、直正１３回の合戦をして一度も負けなし、と記す。

また、甲斐国の戦国大名武田一族の戦記を著した軍学書『甲陽軍鑑』には、この直正について「７歳で人を切り、自軍の兵力５百、千人の少数で敵五・六千人と数度の合戦でいつも勝利した」と記述する。『武将感状記』に「丹波の半国を領した。但馬の比賀美氏２万石の城主の首を打つ」と勢力の拡大化に功があったことを記している。

さらに作家の司馬遼太郎は短編小説『貂の皮』で黒井城主の赤井（荻野）悪右衛門直正と賤ヶ岳の七本槍の一人として名を馳せた脇坂甚内安治の降伏と開城を進めるやりとりを巧妙に描き、俗に丹波の赤鬼と異名をとった直正を偶像化している。

そして、『赤井伝記』は「天正６年３月９日、首切れ庁という病で死す。四海に名を発し、智勇兼備の大将といえども無常の風は防ぎかね」と直正の最後をこのように記している。

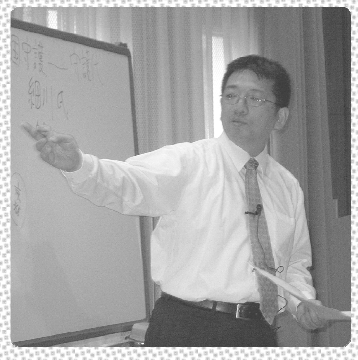
しかし、このような英雄でも直正自身の墓や供養塔は黒井城周辺や丹波にはなく、後年に建立された夫妻の供養塔（五輪塔）が高野山の奥の院に存在する。（了）

荻野直正所用兜（兵主神社蔵）

荻野直正夫妻供養塔（高野山奥の院）

黒井城跡主郭部

赤井忠家肖像画（伊賀講蔵）



丹波波多野氏と八上城

城郭談話会　　福島克彦

【 はじめに 】

戦国時代といえば、各地で戦国大名が自立し、覇権をめぐって争ったというイメージがある。この丹波国多紀郡においても、16 世紀前半から波多野氏が勃興し、他の丹波の地域権力と争っていた。天正６～７年（1578～79）には、最後の当主波多野秀治が本拠地の八上城（篠山市）における籠城戦で、明智光秀と戦った。これは凄惨な籠城戦となり、さまざまな悲劇を生み、後世に逸話、俗説が語られている。

ところで、この明智光秀の丹波攻略以前の波多野氏の歴史は、一般的に、あまり知られていない。たとえば、波多野氏の系図および実名の把握も、論者によって大きな差異がある。系図については『史料纂要』に記載された史料、『国史大辞典』による考証、そして芦田岩男氏の研究がある。しかし、各々大きな相違があり、個別検証もあまり進んでいない。さらに一般書に流布されている波多野氏の「稙通」「晴通」、あるいは「宗長」という人物は、原文書では見あたらない。波多野氏当主の実名でさえ、史実と一般書とのずれがみられる。

こうしたなかで、同時代史料に基づいて波多野氏を考察されたのが、細見末雄氏、芦田岩男氏、八上城研究会である。細見氏は、波多野秀忠の存在を初めて前面に取り上げ（細見 1988）、その意義を語っている。芦田氏は丹波国上村荘に対する波多野氏の押領の問題を取り上げ、地域権力としての成長を取り上げている（芦田 1992、1995）。八上城研究会は、新出史料を開拓し、波多野氏を丹波のみならず、中央政局との関係で洗い出している（八上城研究会 2000）。こうした研究の進捗によって、改めて波多野氏を捉えなおす契機ができつつある。筆者は、前回の丹波学講座において、明智光秀による丹波攻略を扱った。それは丹波を「攻める側」の視点となっていたが、今回は地元の波多野氏を取り上げ、地元丹波を「守る側」の視点にたちたい。また、その居城だった八上城についても検討してみたい。

１．波多野氏の系統

波多野氏の問題を取り上げる前に丹波の政治的状況について触れておきたい。当時、室町幕府では、京都の将軍足利氏を中核に、各国に守護を配置していた。丹波国の守護は細川氏の惣領家が担当していた。細川氏惣領家は、京兆家と呼ばれ、幕政においては将軍を補佐する管領職を代々担っていた。基本的に室町期の守護職は在京しており、代わりに守護代が現地の統治を担当していた（ただし、丹波の場合守護代も在京していた）。この丹波守護代は 15 世紀前半から船井郡八木の内藤氏が世襲するようになっていた。しかし、戦国期に入り、細川氏が澄元系と高国系に分裂すると、丹波も二派に分かれて対立が続いた。丹波の場合、船井郡の内藤氏と多紀郡の波多野氏という二つの勢力が、守護代職をめぐって覇を争うという展開となった。

なお、近年の研究によって、波多野氏には二つの系統があることがわかっている。まず惣領家にあたるのが、清秀、元清、秀忠、元

秀、秀治の系統である。石見国出身の清秀は在京しており、細川政元の被官となり、多紀郡を与えられたという。以来、この地域に根付き、当主元清・秀忠・元秀は仮名「孫四郎」を継承し、一族で惣領を継いでいこうとするイエ意識が芽生えていた。秀忠の嫡男が元秀であったことは確認できるが、他の惣領家の人物関係が父子か、兄弟か、わからない。ちなみに、元清と秀忠との間には実名不明の「孫右衛門」なる人物もいた。彼らは八上城を本拠とし、城下には菩提寺も建立されていた。

もう一つが秀長、与兵衛秀親、次郎という系統である。後述するように、惣領家を支える別の一族であった。現在、秀親の嫡男が次郎であることは確認できる。ただ秀長と秀親の関係は不明である。彼らの拠点は長らく不明であったが、地誌などによれば数掛山城(亀岡市)にあったようである。この一族は、近隣の上村荘の代官職を担っていたが、16 世紀中葉には桑田郡船井郡周辺において勢力を持つようになった。後述するように、惣領家が味方にひきとめるため腐心するなど、次第に存在感を増していった。いずれにせよ、今後、波多野氏の研究は、両系統を区別してから考察する必要がある。

２．波多野秀忠の時代

永正 4 年(1507)、応仁・文明の乱以後の幕政で、勢力を振るっていた細川政元が殺害された。これを契機に、細川京兆家が分裂し、政元の養子澄元と高国の対立が始まった。この家督争いでは、結果的に高国が勝利し、当初波多野氏も、これに服属していた。しかし、大永 6 年 (1526)、高国が波多野元清の一族香西元盛を殺害すると、波多野氏は八上城に籠城して、高国に離反した。波多野氏らは、澄元の嫡男晴元と手を結び、高国に抵抗する意思を固めた。高国軍の丹波来襲を防いだ波多野元清・秀忠は、入洛を果たして、高国を京都から追った。この時、秀忠は上賀茂社に禁制を出している(『賀茂別雷神社文書』)。この高国が倒れた後、堺にいた晴元政権も家臣の阿波衆と、摂津衆との対立が起こり、さらに分裂を続けた。これに大坂本願寺・一向一揆と法華一揆の抗争が加わったため、再び政権が混乱した。

こうした間隙をついて、高国方を継承する細川晴国が、天文元年(1532)に登場し、一時丹波を席巻した。その際、今度は秀忠が晴国に鞍替えし、丹波勢を結束しようとした。この頃に秀忠は受領名「備前守」を名乗り始めている(『離宮八幡宮文書』)。従来「備前守」は守護代家内藤氏の代々の当主が踏襲していた。したがって、明らかに秀忠に丹波国守護代に対する野心があったと言えるだろう。しかし、天文 2 年に、晴元が大坂本願寺と和解し、政治的混乱が収拾されていくと、秀忠も晴国から離脱して、再び晴元についた。天文 5 年に晴国は殺害されている。

天文7年8月には晴元が幕府に出仕した際、秀忠が一人共にしており(『親俊日記』)、晴元に強く信頼されていたことがわかる。晴元の重臣だった三好長慶とともに晴元の片腕となっていた。丹波における覇権も優位に働き、天文 7、14 年には、守護代内藤国貞を攻撃して、これを没落させた。そのため『言継卿記』には秀忠を「細川京兆被官」であると同時に「丹波守護」(守護代)と記している。それが示すように秀忠の時代、多紀郡のみならず、桑田郡、天田郡、船井郡にも文書を出しており(福島 1999・2000)、ほぼ丹波全域に統治権を行使していた。実際、秀忠の文書は、波多野氏代々の当主の文書のなかで、もっとも多く、かつ広域に出されている。また、晴元権力との結びつきも強め、彼の部将だった三好長慶に自らの娘を嫁がせ、婚姻関係で関係を強化した。

３．波多野秀忠と秀親

秀忠は、一族の秀親とともに一時京都に滞在しており、洛中の統治にも乗り出している。年代は不明だが、天文年間頃、京都北少路に

おいて法華寺院妙蓮寺が建立された際、寺域において、波多野氏の軍勢が寄宿することを免除する指令が出されている。

［史料 1］

北少路において妙蓮寺取り立てらるるの由、然るべく候、其家中人数寄宿の事につき、免除せしめ候、この旨を彼寺へ申さるべし候、恐々謹言、

備前守

三月九日　　秀忠(花押)

与兵衛尉殿

これを進らせ候、

［史料 2］

北少路御寺取り立てらるるの由、目出度く候、それにつき、この方家中寄宿のこと、免除あるべきの由、備前守拙者へかくのごとき折紙候、もし兎角申す族候わば、この方へ承るべく候、恐々謹言、

波多野与兵衛尉

三月九日　　秀親(花押)

妙蓮寺

年行事御坊

史料 1、2 ともに『妙蓮寺文書』である。史料 1 は、秀忠が秀親に対して、京都妙蓮寺の造立にあたり、秀親の「家中」が寄宿することを免除する旨を伝え、この内容を直接寺へ伝えるよう指令した書状である。明らかに、秀忠の方が秀親の上位の立場であることがわかる。史料 2 では、秀親が妙蓮寺に対して、造立をめでたいと祝いつつ、秀忠の指令を伝えている。秀忠文書(史料 1)を「拙者へかくのごとき折紙」と記し、1、2 両者の文書を併せて妙蓮寺に進達している。また、文面において、秀親の在京する軍勢を「家中」と称していた。ちなみに史料 2 は、唯一残存する波多野秀親の発給文書であり、その花押が確認し得る貴重な文書である。天文 13 年 10 月には、秀親が 1000 人もの人夫を動員して、内裏の西築地を修復しており(『御湯殿上日記』)、朝廷にも顔が効いていたことがわかる。

秀親は、桑田郡の本梅周辺を拠点としていた。数掛山城が、その居城と考えられている(『丹波志桑田記』)。

４．松永長頼(内藤宗勝)との戦い

さて、秀忠の跡を継いだ元秀の時代になると、晴元政権が再び動揺し始めた。家督争いを続ける高国系の細川氏綱が河内・和泉で活動し始め、河内守護の畠山氏、守護代遊佐長教が、これを後援した。そして天文 18 年には、晴元の重臣三好長慶が氏綱方についたため、晴元と長慶との抗争へと発展していく。長慶は淀川沿いにある江口における合戦で晴元方に勝利し、後に将軍義輝と和平を結んで、京都を抑えた。一方、晴元は京都を離れ、京都の北に位置する丹波宇津(京都市)へ入った。山深いこの地域を基盤にして、晴元は反長慶戦線のゲリラ戦を繰り広げた。この時の敵対関係は以下のとおりである。

［細川晴元方］

波多野元秀、波多野秀親、宇津氏

［三好長慶方］

細川氏綱、松永久秀、松永長頼、内藤国貞

重要なことは、当初、波多野秀親が両者の間で、どちらに味方するか逡巡していた点である。秀親は桑田郡に勢力を張っていたため、ちょうど宇津と多紀郡八上城の間に位置する。その区域を何とか確保するため、晴元、元秀は、秀親を味方につけようと、さまざまな努力を重ねた。晴元は、秀親に対して、宇津城へ進発していることを聞き、その忠節を賞している。そして「目録をもって、望みの在所、申しつけ候」と記し、味方になった見返りには、複数の知行地を与えると約束した。その際の知行目録には、波多野元秀が書類を作成し、晴元が袖判を記している。これによれば、佐伯荘の一部、篠村、西加舎(以上、亀岡市)、八木嶋(南丹市)、西岡桂、下京(京都市)など、9 ヶ所の知行、代官職が認められている(『波

多野文書』)。元秀は、他の本梅、上村(亀岡市)における秀親の知行も認め、起請文を記して、必ず秀親を見放さないとしている。これは惣領家が一族に出した内容としては異例である。こうした元秀らによる強い説得が奏功して、秀親は晴元派についた。この秀親の活躍もあり、桑田郡、多紀郡をめぐる戦闘は、晴元方が何とか耐えしのび三好勢を防いだ。逆に長慶方の内藤国貞を戦死させるなど、打撃を与えている。この時、内藤氏の家督に介入して、同家の再興に力を尽したのが、松永長頼である。彼は久秀の弟で、後に内藤家を継ぎ、内藤宗勝を名乗った。以後、天文 22 年から永禄 2 年(1559)にかけて、宗勝による反撃が始まったらしく、前述した秀親らも、長慶方に服属した。八上城から元秀は退き、松永久秀や宗勝の一族、松永孫六が入城したようである。以後、天文22年～永禄4年の間、元秀の文書は姿を消した(福島 1999・2000)。多紀郡も内藤宗勝の支配下に入ったことになる。

５．波多野元秀による再興

しかし、永禄 5 年頃に入ると、元秀は急速に勢力を回復したらしい。同年の 12 月には多紀郡の酒井松鶴に対して、味間伊豆守の人夫徴発を免除すると指令しており(『波多野芳野文書』)、明らかに丹波の土豪たちの上級支配者になっていたことがわかる。さらに、氷上郡の荻野直正が自立し、一族の赤井時家は何鹿郡(綾部市)の土豪に対して安堵状を発給し始めた(『阪根文書』)。

三好長慶の後援のもと、丹波を席巻した内藤宗勝は、荻野氏らを掃討するため、丹波北部に攻め入った。しかし、永禄 8 年 8 月、荻野直正との戦いに敗れ、切腹を強いられた。こうして、内藤氏勢力は後退し、丹波における三好権力は一気に駆逐された。同年 5 月に三好三人衆と松永久秀は、13 代将軍足利義輝を殺害し、各地の諸勢力から反発を買っていた。当時の畠山方の実力者安見宗房の書状には、宗勝の死を「上意様御天罰」と評していた(『尊経閣文庫所蔵文書』)。宗勝を倒した荻野直正の合戦には、こうした反三好勢力との連携があったものと思われる。

八上城に滞在していた松永孫六も、波多野氏の攻勢、圧迫に堪えられなくなった。同 9 年、元秀らは八上城を「前々家が城」と主張し、これを攻撃した。結局。播磨三木城の別所氏が仲介して、孫六を退城せしめた(『細川両家記』)。こうして元秀は八上城へ復帰することになった。

６．波多野秀治と明智光秀の丹波攻略

永禄 11 年 9 月、尾張の織田信長が 15 代将軍義昭を奉じて上洛すると、波多野氏は、これに服属した。当時は元秀の跡を継いだ秀治が担当し、元亀元年(1570)11 月には、信長へ太刀と馬という進物を届け、信長からの礼状が出されている。この頃、荻野直正も信長に服属していたらしく、元亀 4 年 1 月 1 日段階において、丹波地域は「信長衆」の支配下にあると、奈良の僧侶尋憲は記している(『尋憲記』)。

しかし、同年に信長が義昭を追放すると、荻野直正は、信長に離反した。そのため、信長は天正 3 年に明智光秀に命じて、これを攻撃せしめた。黒井城への猛攻で、直正は落城間近という危機に直面した。ところが翌天正 4 年正月、明智方に加わっていた波多野秀治が突然裏切り、荻野方に加わった。これによって明智光秀の丹波攻略は一時頓挫した。

天正 6 年頃、光秀は軍勢を立て直し、八上城を攻撃した。今回は万全を期し、城のまわりに柵や塀をもって取り囲み、城外との連絡を取らせなかった。城内では、多くの者が餓死し、籠城側は凄惨な状態となった。そのため、城兵の一部が蜂起し、秀治らを捕え、光秀へ差し出した。秀治らは安土城まで護送され処刑された。当時、反信長戦線が活発に展開し、伊丹城の荒木村重、三木城の別所長治らが籠城戦を繰り広げていた。しかし、村重

は「波多野兄弟張付にかかり候如く、やみやみとはあるまじく候」と強弁していた。これは村重に波多野秀治の磔がいかに心理的に影響を与えていたか物語るものである。また、羽柴秀吉は別所長治に開城を勧告するにあたり「丹波の波多野果て候如くに候ては、末世の嘲弄、口惜しく候」と説得して、長治の同意を引き出した(『信長公記』)。秀治の処刑は、他の反信長の武将たちに強い心理的打撃を与えていたことがわかる。

7．波多野氏八上城について

八上城は、明智方に接収され、以後豊臣段階に至るまで使用され、一部改修を受けたものと思われる。しかし、天正 16 年には山麓を示した文献で「古城坂」という表記がみられ(『荒木文書』)、山城は廃されていたと考えられる。慶長 7 年(1602)に前田茂勝が八上に入っているが、これは山麓部分と推定される。しかし、慶長 13 年に松平康重が入部し、篠山城を築城すると、八上城は廃され、城下町も移転された。

現在残る山頂周辺に残る石垣や虎口は、他の丹波の城郭と比較すると、やはり明智・豊臣段階と考えられる。では、波多野氏段階の遺構の特徴はどうであろうか。以下、それに絞って検討する。

まず、八上城は、高城山の山頂周辺と、南側の尾根の突端である奥谷城に大別される。波多野氏も、従来は、この奥谷周辺に居館を構えていたものと思われる。周囲には屋敷地名があり、城下集落が点在していた。

また八上城の規模は、氷上郡に勢力を持つ荻野直正の黒井城、船井郡に勢力を持つ内藤国貞・宗勝の八木城と並び、丹波の三大山城の一つである。黒井城も八木城も、主峰山上にある本丸(主郭)を中核に、尾根線沿い、支峰に至るまで曲輪を張り巡らせ拡張している。この点については、八上城も類似しており、同じ郡規模の勢力と山城の大規模化が合致している事例として重要である。

ただ、黒井城、八木城については堀切・土塁が常に主郭を守るかのように築かれており、広がった城域を統制しようとする姿勢が見える。これに対して八上城では、拡張は遂げているものの、こうした土塁・堀による統率という面では弱い。また、周縁にいけばいくほど、削平の度合は弱くなっている。その要因を探ることは難しいが、こうした点が波多野氏段階の八上城の特徴と思われる。

【 おわりに 】

以上、戦国期波多野氏について紹介してきたが、最後に要点をまとめておきたい。

第一に戦国期の波多野氏には秀忠、元秀、秀治らの惣領家と、秀親らの一族の二つの系統があったことである。両者は同じ「家中」であったが、秀忠は秀親に対する上位の立場にあり、両者が主従関係にあった。惣領家は八上城を、秀親の系統は桑田郡の数掛山城にいた。

第二に波多野氏の発給文書のうち、16 世紀前半の秀忠が、もっとも数を多く残存している。また丹波全域および京都など、より広域に出している。晴元権力とも結びつき、「備前守」を名乗り、「丹波守護」(守護代)として称された。秀忠の時代に、まさしく丹波全域に勢力を広げたことになる。

第三に秀忠の跡を継承した元秀の文書は、天文 22 年～永禄 4 年の間、空白がある点である。この間は、三好権力の助けを得た内藤宗勝が丹波を席巻した時期にあたり、当初は反三好で動いていた秀親らも、結果的にこれに服属していたようである。元秀の文書がないことから、この時期惣領家の元秀はいずれかに没落し、身を隠していたものと思われる。

最近丹波では篠山城築城 400 周年ということもあり、当時の歴史を振り返るよい機会となっている。しかし、篠山城を考える際、その前身である八上城と、それを 70 年間守り抜いた波多野氏は避けて通れない存在といえよう。戦国期畿内の政治史は複雑で、錯綜して

おり、敬遠されがちである。そのため、戦国期の波多野氏に対する関心も希薄になりがちであった。しかし、多紀郡独自の地域権力に成長したことを想起するならば、地元勢力に対する関心は、もう少しひろがってもよいのではないだろうか。今回、戦国期にこだわり、波多野氏の歴史について紹介させていただいた。

［参考文献］

細見末雄 1988『丹波史を探る』神戸新聞総合出版センター

芦田岩男 1992「丹波波多野氏の勢力拡大過程」『兵庫県の歴史』26

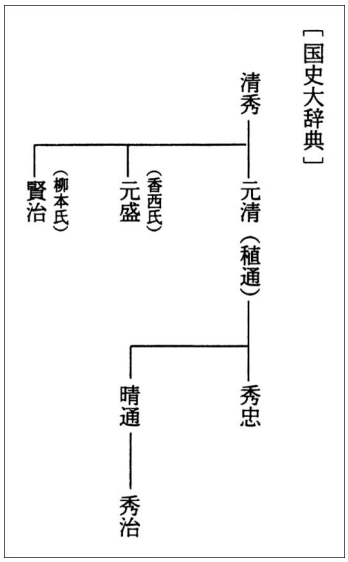
芦田岩男 1995「中世の丹南」『丹南町史』上

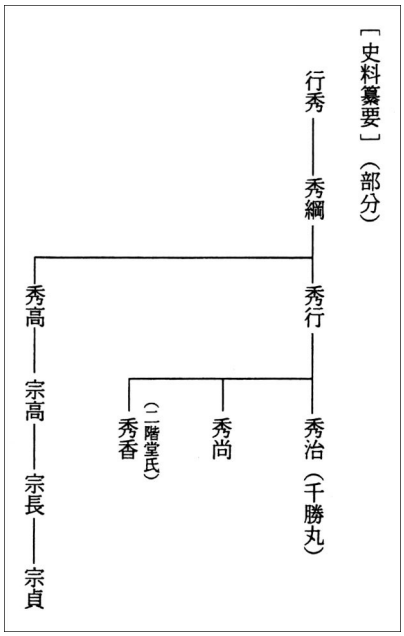
福島克彦 1999・2000「丹波波多野氏の基礎的考察」（上・下）『歴史と神戸』216, 219

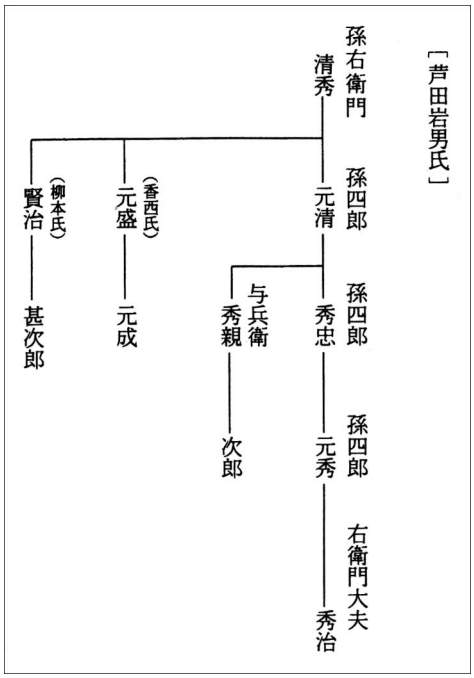
福島克彦 2004「織豊系城郭論と地域史研究」『城館史料学』3

八上城研究会 2000『戦国織豊期城郭論』和泉書院

亀岡市『新修亀岡市史』資料編 1







織田一族と柏原陣屋

丹波市教育委員会　　高雄 由紀子

１．はじめに

天正 10 年(1582)本能寺の変で信長・信忠を失った織田家は、その後の江戸時代をどのように生き抜いたのか。途中断絶があるものの、ほぼ江戸期を通じて織田家が藩主を務めた柏原藩を取り上げてその盛衰を計るとともに、藩の政庁である柏原陣屋の造営とその構造を紹介する。

２．江戸時代の織田家

江戸時代の織田家は、大名・旗本・高家として存続した。

幕末まで存続した大名家は、信長の次男・信雄の家系である天童藩・柏原藩（各 2 万石）と信長の弟・長益の家系である戒重藩・柳本藩（各 1 万石）の４家があった。

旗本は６家あり、氷上郡内では信包の４男信當が谷川村ほか８ヶ村・３千石の知行を認められ旗本として存続した。陣屋は、中兵庫信用金庫谷川支店の職員駐車場の付近にあった。

高家は、旗本と同じく万石未満であるが、家柄由緒あるものが任ぜられ、幕府の儀式・典礼をつかさどり勅旨の接待や京都・日光等への名代を務めた。織田家では信長の血を引く３家が任じられていた。

前期柏原藩所領配置図

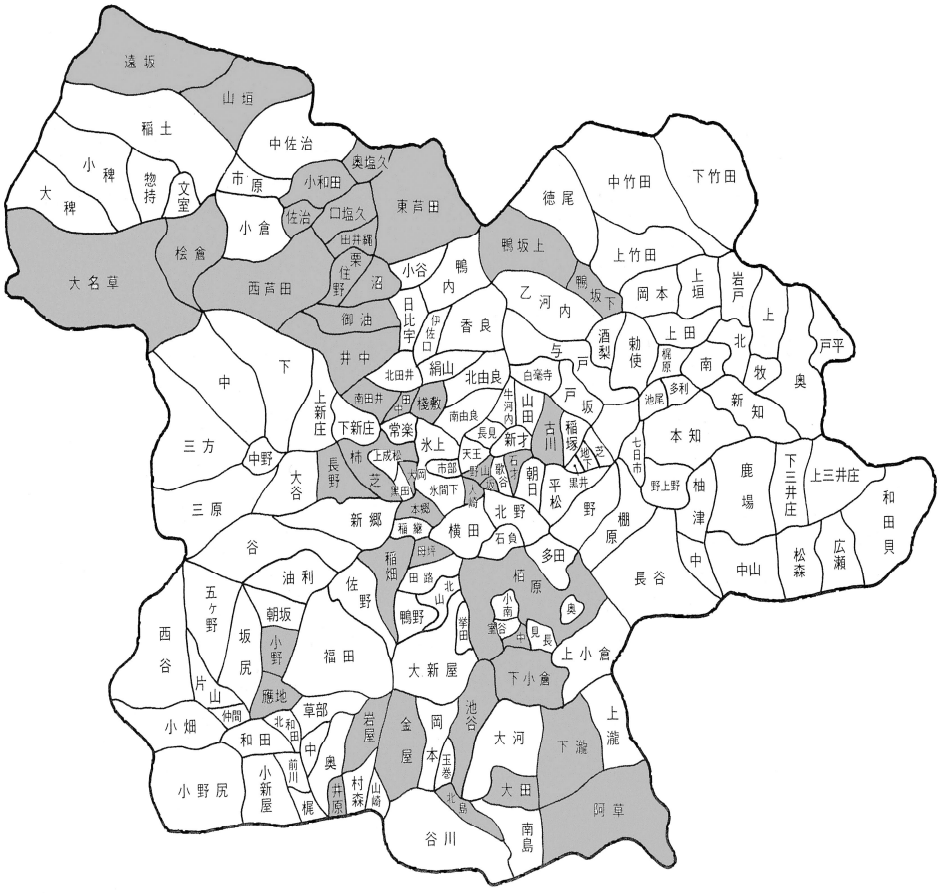
３．柏原藩

柏原藩は、前期と後期の２時期にわたって織田家によって治められた藩である。

A. 前期柏原藩

慶長３年(1598)織田信包が秀吉より氷上郡の内3万6千石を与えられ始まる。

陣屋は、奥村川とそこから分流させた堀川により区画・囲繞されたやや不整形な長方形の敷地のなかに築かれていたことが隣村の東奥自治会所蔵の絵図から窺われる。3代藩主信勝は、慶安３年（1650）28歳で継嗣の無いまま亡くなったため、柏原藩は廃絶となり、所領は天領や旗本諸侯の領地となった。



後期柏原藩所領配置図（氷上郡内のみ）

B.後期柏原藩

元禄８年（1695）、宇陀騒動により大和松山藩から国替となった織田信休が、氷上郡44ケ村〔石高14,486．984石〕、天田郡５ケ村、何鹿郡８ケ村の計2万石を領した。後期柏原藩は、初代信休から10代藩主信親まで続き、廃藩置県を迎えた。

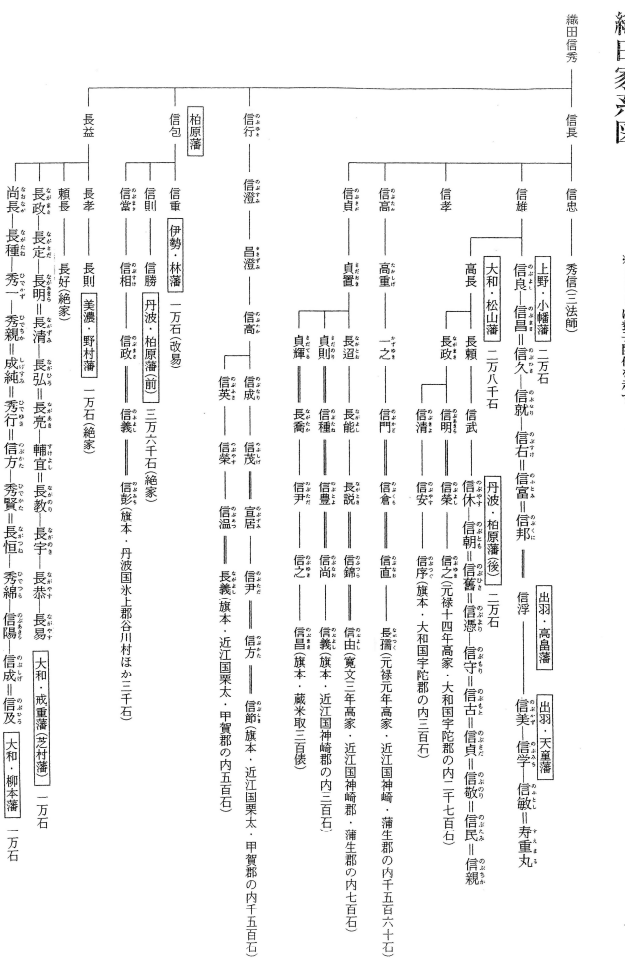
４．後期柏原藩主の人物像

１）４代信憑･5代信守

高家・織田信栄の次男・信憑が柏原藩に養子として入ったのは、宝暦８年（1758）のことで、3 代藩主信舊の息子たちが相次いで早世したためであった。ところが、その翌年信舊に実子・信応が生まれた。ここに家督相続にまつわる火種が生じたといえる。

信憑は、先代の信舊から「支家から宗家を継げたのは過分の幸福である。恐れ慎むことを忘れるな」と遺言されていたが、柏原藩主の中で唯一、文化 12 年（1815）に従四位下に任じられた。これは、老年に至るまで参勤交代や登城し藩主の務めを行ったということで任ぜられたものだが、密に幕府閣老に四位に叙せられるよう再三献上品を贈っている。

また、「信応を継嗣とせよ」と遺言していたが、信応は享和元年（1801）亡くなってしまった。この時、信応には息子の儀之助（後の信古）がいたが、信憑はこれを顧みず、自分の長男信守（瀬之助）を世子とし



ている。

この後も信憑は、享和３年（1803）に若殿様（信守）の諸事お指図が殿様と同様に扱われるようになるものの、文政 10 年（1827）に隠居するまで、藩主として君臨しつづけた。

そして、嫡子となった信守は、さらに藩政を混乱に陥れ、藩財政を悪化させた。

信守の性格は、『柏原藩史』によると

・敏捷豁達、頗る狡知有り。

文政 11 年（1828）江戸上屋敷が火災に会った際、門に火をつけて公役を３年間免じられるようにした。火災後、尾張徳川家に木材３千本を恵んでもらった。

・乖戻自用、傲慢奢侈

大広間詰になり格上の大名との付き合いを好んだ。

この信守の性格・言動が２度の御家騒動を起こし、藩政の混乱を招く結果となった。

御家騒動　①秘命騒動

秘命騒動の発端は、まだ継嗣（世子）であった信守が、文政６年（1823）２月４日に出した命令であった。『柏原藩政日記』には、「豊次郎殿〔信古〕御病身ニ付、御家老中ゟ達之有候事」とあり、信古が病弱でその職務に耐えないと隠退させる命令を出した。信守が実子信貞を藩主とするために画策したもので、執政らはやむを得ずその命令に従ったが、馬廻等が徒党を組み反対し、信古にも訴え、藩内は混乱した。ついに、目付・馬廻ら５名が死を決して諫め、ようやく信守もこれを聞き入れ、信守の長女安子を信古と結婚させることを条件にこの命令を撤回し、信古を継嗣とした。

一旦解決したかに見えたこの騒動は、文政 11 年（1828）再燃する。前年正式に藩主となった信守は、自らの柏原初入封前に、条件としていた信古と娘安子を急遽結婚させ、その３日後に信古に次の世子を信守の実子・信貞とする願書を認めさせようとしたのである。これには、信古以下藩士も反対したが、信守はこれが決まらなければ柏原に行かないと言い張り、万策尽き、信憑が強いて信貞を世子と定め幕府へ届け出た。

このような信守の振る舞いに長年苦しんできた藩士たちは、ついに執政の生駒広綱以下が結束して密かに幕府に信守の隠居を要請し、信守は文政 12 年（1829）幕府の密命により致仕することとなった。

御家騒動　②保野騒動

信守の隠居により、平穏を取り戻したかに見えたが、騒動はまだ終わらなかった。

保野騒動は、天保９年（1838）１月２日、「信守と保野が柏原に幽閉されようとしている」と保野の付人・しまが老中脇坂安董へ駆込訴に及んだことで発覚する。保野は、

信守の妾で、江戸に戻ることを希望した信守を引き止めるために家臣達が保野を柏原に呼び寄せようとした。これを知った信守は保野へ手紙を出し、自分を江戸へ行かせないために保野を柏原に呼び寄せているので、これに従わないようにと伝えた。このため、保野は病気と称して柏原に行かなかったが、信守は自分が江戸に行けないのを悟ると、前言を翻し、保野に柏原へ来るように迫った。しかし、保野は疑心暗鬼に陥り、その言葉を信じず、付人のしまが駆込み訴えを起こした。

この時は2日後しまを引き取り、これまでと同じ待遇にするよう命じられていたが、理由のわからない藩士たちが、しまを質したが、扱いに困り落ち着くまでの間長屋に押し込めた。その扱いを気の毒に思ったしまの義理の父母が再度駆け込み訴えをしたため、今度は、評定所で吟味を受けることとなった。

江戸の留守居添役であった田村要左衛門が記した『評定所手続』には評定所での吟味の内容や評定の内容などがまとめられている。

これによると、しま・保野の処遇だけでなく、吟味中に発覚した不手際もお咎めを受け、天保10年（1839）8月16日老中水野忠邦の屋敷にて信古は逼塞、信守は遠慮を申し付けられた。

保野騒動は、評定は軽微な罪とみなされ藩士たちの大半は押込み、叱り程度ですぐに免じられた。

2）8代藩主　信敬

8代藩主・信敬は、宇土藩主細川家に生まれ、柏原藩7代藩主信貞の仮養子であった。仮養子とは、継嗣の決まっていない藩主が江戸を離れる際に老中に届け出る一時的な後継者（仮養子）のことで、この届は何事もなく江戸に戻れば藩に返された。しかし、信貞が柏原で亡くなってしまったため、信敬が本当に柏原藩へ養子として入ることとなったのである。

この仮養子は、末期養子が認められるようになってから行われている。前期柏原藩の3代藩主・信勝に継嗣なく廃絶になったのと対照されるものであり、廃絶・改易により浪人が増え、その不満から起こった由井正雪の乱以後、無嗣による藩の取り潰しを減らすべく改められたのである。

さて、芝三田にあった柏原藩の上屋敷〔現：港区三田・三田共用会議所〕に入った信敬は、嘉永6年（1853）18歳の若さで亡くなるまでの6年の間、「柏原藩中興の名君」と称えられる治世を行った。それは、信敬の性格、言動、日々の生活態度が柏原藩士たちに大きな影響を与えたからである。

当時江戸上屋敷で、信敬に近侍した田村看山の書き残した『看山昔話』を元に信敬の性格や日常生活をたどる。

●信敬の上屋敷での生活

	表居間（正殿）で朝食
	奥居間（寝殿）で休憩
午前6時～8時	2日おきに馬術の練習
午前7時	習字
午前10時	東殿(宝鏡院＝信貞の室)、南殿(養徳院＝信古室)で省禮
	表居間（正殿）で執務
	奥居間(寝殿)で読書、質問
昼～午後1時	昼食・休憩
	槍・弓の稽古、講義・会読
午後4時	南殿へ定禮
	寝殿で夕食
午後6時	東殿へ定禮
	近臣と和歌・漢詩。囲碁
午後10時	就寝

信敬は、生家の細川家での藩主教育の方法で学んでいたが、教育係として柏原藩に

従った宇土藩士は、「幼君の寝殿は家塾とみなし、君臣研究をなすべし。しからざれば幼君の徳を成すをあたわず」といい、看山は柏原藩では、かつてこのような教育がされていたが廃絶してしまい、しっかりした教育ができていなかったと述べ、細川家の方法を見て「驚嘆夢の覚めたるごとく、ついに後来の準則となる。」と記している。

他家からの養子を迎え、他藩の家風が柏原藩に新しい風をもたらしたことも信敬が柏原藩に与えた大きな影響の１つである。

また、このような信敬の生活は、藩士たちにも影響を与え、「近臣みな書生のごとく読書の声止まず」と勉学に励むものが増えた。この影響は上屋敷にとどまらず、柏原にも広まり、北町に藩校又新館を開校し、小島省斎に藩政改革の上申書を提出させたことは、後の財政改革や藩校崇広館の開校につながるものであった。

嘉永４年（1851）には、信古の娘鶴姫との婚礼が行われたが、嘉永 6 年（1853）6 月に信敬は病に倒れた。

病気は脚気だった。脚気は「江戸患い」と呼ばれており、原因は精米された白米を食べるようになったため、糠に含まれるビタミン B_1 が摂取できなくなったからであった。

7 月 24 日には、他藩の御殿医を招いて診察、薬を投与されたが、その甲斐なく翌日午後 1 時 18 歳で脚気衝心（脚気に伴う急性の心臓障害・心不全）のため亡くなった。

このあと、９代・10 代藩主ともに他家から養子を迎えることとなった。

５．柏原陣屋

陣屋には、大きく分けて２つの種類がある。１つは、柏原陣屋のように城を築くことができない小藩の大名の政庁。もう１つが、飛騨高山の高山陣屋のように幕府領の代官所として作られたものである。

同じ織田一族の柳本陣屋は、橿原神宮に移築された天保 15 年（1845）再建の表向御殿が現存し、国の重要文化財に指定されている。

柏原藩では移封により新たに陣屋を築く必要があったものの、なかなか着工することができず、成松畑にあった田忠助（田ステ女の長男）の屋敷を借り受けて仮の屋敷とした。ようやく陣屋建設に着手できたのは正徳３年(1713)、移封後 19 年後のことだった。

陣屋の造営場所は、元禄９年（1696）の奥村（現・東奥）と下滝村との村替の段階で決定していたことが藩政日記から分かる。

陣屋の規模は、南北 160m、東西 130m で現在の兵庫県柏原総合庁舎、崇広小学校を含み、敷地内には、表御殿などの主要な建物のほか、下台所や味噌蔵などがあった。

正徳３年 11 月 21 日	老中へ陣屋作事を届出
正徳４年 2 月 6 日	地祭（地鎮祭）
3 月 25 日	居間の棟上
6 月 4 日	納戸・御用所・台所道具の引越開始
6 月 6 日	藩主信休が柏原に到着
6 月 11 日	信休の子供たちの引越
12 月 25 日	御書院まで完成

しかし、この陣屋も文政元年（1818）5 月 11 日長局から出火し焼失した。現存する陣屋の表御殿は、文政３年（1820）に再建されたものである。

○建物と使われ方

陣屋の建物はその用途により 4 つに区分される。

表御殿	藩主と来客との対面等、儀式の場
中御殿	藩主の日常生活、政務を行う場
奥御殿	女中や奥方の生活の場
御用所	藩士が政務をおこなった場所。

ほかに御台所や幕末には藩校「崇広館」も置かれた。

○陣屋の整備

平成 15 年度から陣屋の整備をおこなっており、昨年度、第１次整備が終了した。この整備は、『整備基本計画』に基づいて実施し、その基本方針は陣屋を江戸時代後期の姿に戻すことを目標としている。

今年度は、御用所、台所付近の発掘調査を行っている。

６．さいごに

今回は、江戸時代の織田家と柏原藩の概要に触れたに過ぎない。柏原藩については未だ解明されていないことも多く、今後新たな資料の発見や資料の総合的な調査検討によってその歴史像が大きく変わる可能性を秘めている。

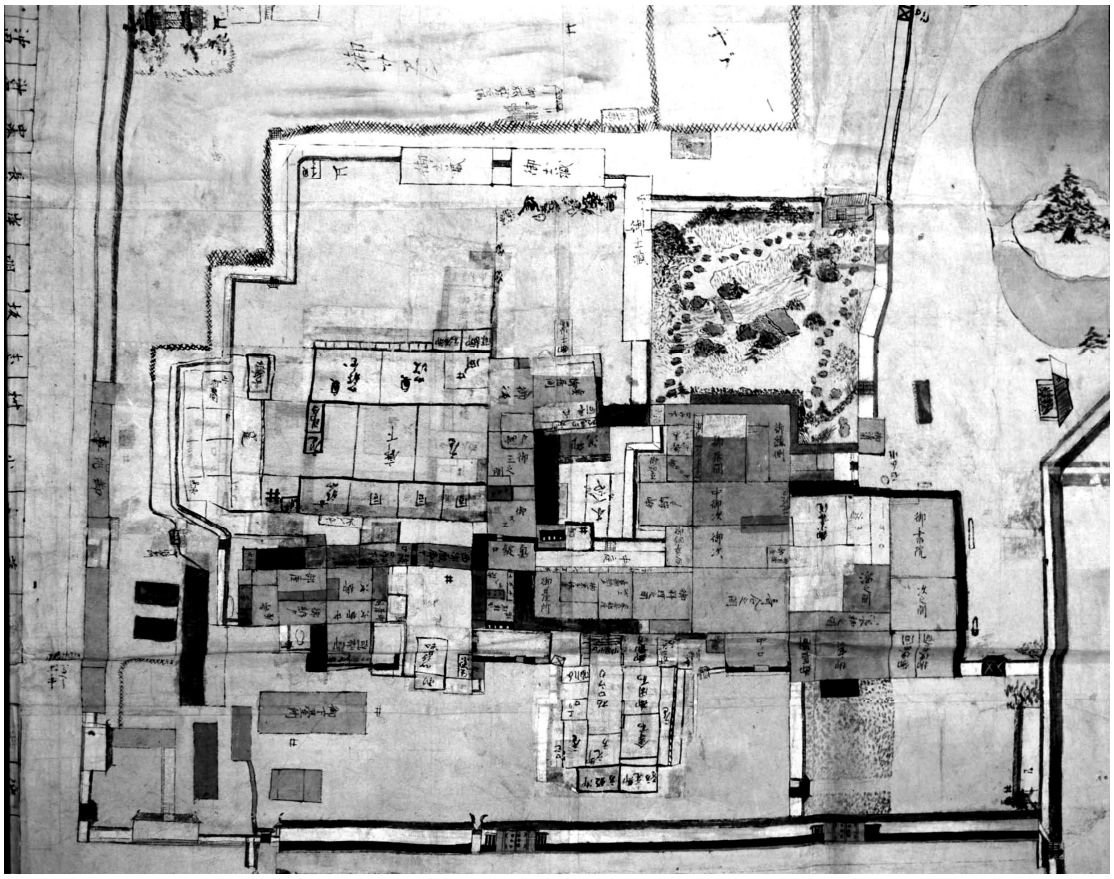
現在、教育委員会では地域に残る古文書などの所在調査を進めている。地域に根ざした歴史遺産の保存と活用が主な目的であるが、これらの調査が元となり、丹波市の江戸時代の様子をより詳細に描き出せるようになることが期待される。

［参考文献・資料］

『看山昔話』田村看山　明治 25 年

『柏原藩史』篠川　直　明治 31 年

＊現在の地名「柏原」は、明治 3 年以降使用されるようになったもので、江戸時代には「栢原」の字が用いられていた。今回は、混乱を避けるため現在の表記で統一した。



陣屋平面図（柏原城下図より）

松平・青山氏と篠山城

兵庫県立考古博物館　　山上雅弘

１．はじめに

近年、篠山城跡では周辺の整備が目覚しい。大書院の復元や二の丸石垣の修理工事が行われ、往時の姿が徐々に復原されている。今まさに、400 年を経て篠山城は再生の時を迎えているといってよい。

ところで、この城はかつて徳川幕府が豊臣家に対する戦略的な目的から、威信を懸けて築城したことでよく知られる。つまり天下普請の城なのである。本稿では活気にあふれた築城前後の経緯について述べるとともに、代々在城した近世篠山藩の大名たちを紹介したい。

さて、本題に入る前に篠山の位置について近隣の亀山と比較しておきたい。亀山は天正５年（1578）以降、明智光秀が丹波計略の拠点とした場所で、その後の豊臣期においても丹波南部の中心として重視された。なにより羽柴秀勝(信長の息)・豊臣秀勝(秀吉の甥)・小早川秀秋ら豊臣家親族の入封はそのことをよく物語っている。また、文禄４年（１５９５）には前田玄以が亀山城を本城として、桑田・多紀郡を治めている。つまり、戦国時代末以来、亀山が京に近いこともあって、時の政権から重視されたのである。これに対して、当時の八上城はこの支城的な位置にあったと思われるが、その様子ははっきりしない。

２．松平康重の入封前後

慶長 7 年（1602)、豊臣政権において五奉行として活躍した亀山城主の前田玄以が病没すると、前田家は子息茂勝の相続は認められたが、亀山城から八上城へと移された。しかし、当主茂勝の素行が悪く、家臣尾池青左衛門を手打ちにするなどしたために、慶長 13 年（1608）に幕府から改易されてしまう。この事件は、その後の篠山城築城を考えると幕府の思惑も見え隠れして、なにやらきな臭い。

この後に入封したのは、徳川家の譜代大名である松平康重（第１図）である。彼には家康落胤説が伝わるが、その信憑性は高いといわれる。しかし、本人がそのことを喧伝した様子はないので、おそらく実直な人柄であったのだろう。康重の松平家は三河松井氏の一族で、父の武功により松平姓を賜っている。さらに康重の「康」も家康から賜ったもので、若年の時には、長篠の戦い（天正３年 1575）などで武辺の活躍を見せている。その後、三枚橋城（静岡県沼津市)、騎西城（埼玉県北埼玉郡騎西町）２万石、笠間城（茨城県笠間市）３万石と累進し、慶長 13 年（1608）に八上城に移ることになる。

入城早々、康重に命じられたのは築城であった。丹波の地は徳川幕府にとって未だ進出の叶わなかった地であり、その入封は多分に政治的なものが含まれた。また、このとき初めて篠山は、亀山よりも大規模な築城が行われ、その地位が逆転する。より西国に近いのがその原因であろう。

ただ、康重の在任期間は慶長 13 年～元和 5 年（1608～1619）までのわずかな期間であった。まさに築城のための入封だった。その後は岸和田城（大阪府岸和田市）に移り、寛永 17 年（1640 年）6 月 27 日に 73 歳で没した。跡は次男の松平康映（やすてる）が継いだが、岸和田は要地であるとの理由から、播磨山崎に転封させられ、慶安 2 年（1649）には石見浜田へ移された。

３．篠山城築城

築城（第４・５図）に当たって藤堂家『公室年譜』では「丹州は山陰道の要地たるに八上の城地は要害悪しきに拠て是を廃し、其辺篠山に城を築くべきの沙汰なり、遂に康重八上に赴き云々」と述べている。このほか、城地の選定に当たっては家康自身の採決によって王地山・篠山・飛山の３つから篠山が選ばれたという所伝も伝わっている。いずれにしても幕府自身が並々ならぬ決意で篠山築城を決定したことがこれらの経緯からはみえてくる。

築城に参加した大名は 20 家、石高 354 万 2600 石に達する。そして普請総奉行に池田輝政、縄張り奉行に藤堂高虎、さらに石垣普請のために穴太衆として筑後・三河・駿河の 3 人、普請奉行には玉虫勝茂・石川八左衛門・内藤金佐衛門らが配置された。これに幕府からの目付として松平重勝が差し向けられている。助役大名は主として西国の外様大名たちで、国別にみると丹波・丹後・播磨・備前・美作・備中・備後・安芸・周防・長門・紀伊・阿波・讃岐・土佐・伊予など 15 ケ国に及ぶ。

築城工事の経過は慶長 14 年（1609）3 月に鍬入れが開始され着工している。6 月には助役大名が参着し石垣構築が行われている。そして 10 月 5 日には奉行衆・大名衆が早くも引き上げることとなる。残りの工事も年末には終了し 12 月 21 日に総人足が帰国して、ほぼ完了した。12 月 26 日には領主松平康重が入城し一段落を見ている。

よく知られていることであるが、このときの篠山城築城の石切場が、現在でも篠山市内の各地（第３図）に残されている。その中でも当野～草野周辺には刻印石（第 2 図）や矢穴石と呼ばれる築城石特有の石材が散布する。

この工事は期間が短く、篠山城の築城が特別なものとされがちだが、篠山城築城の直後から始まった名古屋城の築城工事と比較してみると、決して当時としては異例なものでないことがわかる。

名古屋城の築城は慶長 14 年（1609）普請奉行に牧助右衛門らが決定し、同年 11 月には下見などが行われた。篠山城の進捗を見ながら、何時でも作業が開始できるように準備が進められていたのである。

そして、篠山の築城が終了した翌年の正月 9 日に縄張りが開始され、閏 2 月 8 日に助役大名が名古屋に到着して、同月末頃に工事着手の運びとなった。これによって城堀の掘り取り・土盛などが行われ、石垣構築のための準備が進められた。その後、6 月 2～12・13 日に石塁構築が開始され、8 月 27 日前後には天守石垣が完成したという。さらに、9 月末には本丸・二の丸・西の丸の石垣工事がほぼ完了し、遅れた場所も 12 月にはすべて完成に至ったという。つまり、篠山城とほぼ同じ経過を辿って名古屋城の築城は進められたのである。しかし、名古屋城の規模を考えると、より突貫工事であったことが想像できる。この速さは大坂城・江戸城などの他の天下普請と比べてみても、あまり変わるものではない。

このようにみると、むしろこの頃の労働集約型の築城がどれ程すさまじいものであったかが窺われ、圧倒される。ただ、近年の研究では単純に労働力の問題ばかりでなく、築城技術が日進月歩で進んだことと、

恒常的な築城で多くの専門技術者が常に維持されていたことも、大きく寄与していることがわかってきている。

４．篠山藩の大名

築城の慌しさが過ぎ去り、短期間で終わった松井松平氏の治世の後、上野高崎から藤井松平氏が入封する。ようやく近世篠山の藩政が始まったのである。藤井松平氏は信吉・忠国の２代に渡って、元和 5 年～慶安 2 年（1620～1649）の間、治世を行った。しかし、２代忠国の厳格な治世が幕府の目に留まり、明石藩 7 万石に累進する。忠国は出世するが、この治世には領民は苦しまされたといわれている。一方、藤井松平氏の時、ようやく篠山の城下町の完成を見ている。都市“篠山”の町の発展はこの時から始まったといわれ、篠山城は近世城郭としてようやく完全に完成を見たのである。

次に、篠山に入封したのは形原松平氏５万石である。摂津高槻城 3.6 万石からの累進で、治世は慶安 2 年～寛延元年（1649～1748）の期間である。康昌・典信・信利・信庸・信岑と５代にわたって篠山に在城した。しかし、信岑のとき百姓一揆を引き起こし、亀山に転封となってしまう。

青山氏は形原松平氏と交代で亀山から入封した。治世は寛延元年から明治（1748～1868）にいたるまでである。忠朝・忠高・忠講・忠裕・忠良・忠敏と６代に渡って在城した。

中でも忠裕は英邁な藩主として知られ老中を 32 年間勤め、幕府の重鎮として活躍している。その功によって篠山藩は１万石の加増（合計６万石）を受けることになる。次の忠良も大阪城代を勤めた。

５．おわりに

篠山城は徳川幕府の西国大名への要の城として、天下普請によって築かれた。このときから篠山の地は関西の譜代雄藩として幕府から重要視され続けた。歴代大名には老中を勤め幕府重鎮として活躍したものも輩出している。また、江戸中期以降百姓一揆などが発生し、領内の混乱も見られたが、大名の転封が比較的少ないこともあって、全体的には安定した治世が行われたといえる。これによって、篠山は丹波の中心都市として繁栄し、豊かな都市文化を育むことになる。

[参考文献]

１．朽木史郎『篠山城』1931 篠山町
２．奥田楽々斎『多紀群郷土史考』1958
３．朽木史郎「篠山藩」『別冊歴史読本　江戸三百藩藩主総覧』新人物往来社　1997
４．朽木史郎「篠山城」『日本城郭大系巻 12　大坂・兵庫』新人物往来社　1982
５．丹南町史編纂委員会『丹南町史　上巻』1994
６．北崎豊二「岸和田藩」『物語藩史第 8 巻』1977
7．岡光夫「篠山藩」『物語藩史第 8 巻』1977
８．森田恭二編『おもしろ日本史』和泉書院 2008
９．岸和田市史編さん委員会『岸和田市史第 3 巻　近世』2000
10．篠山町教育委員会『史跡篠山城跡－二の丸発掘調査報告書－』1995
11．兵庫県教育委員会『篠山城旧三の丸跡』2006
12．兵庫県教育委員会『篠山城採石場』1988

松平康重肖像（川越·光西寺蔵）

図１

図２

図３

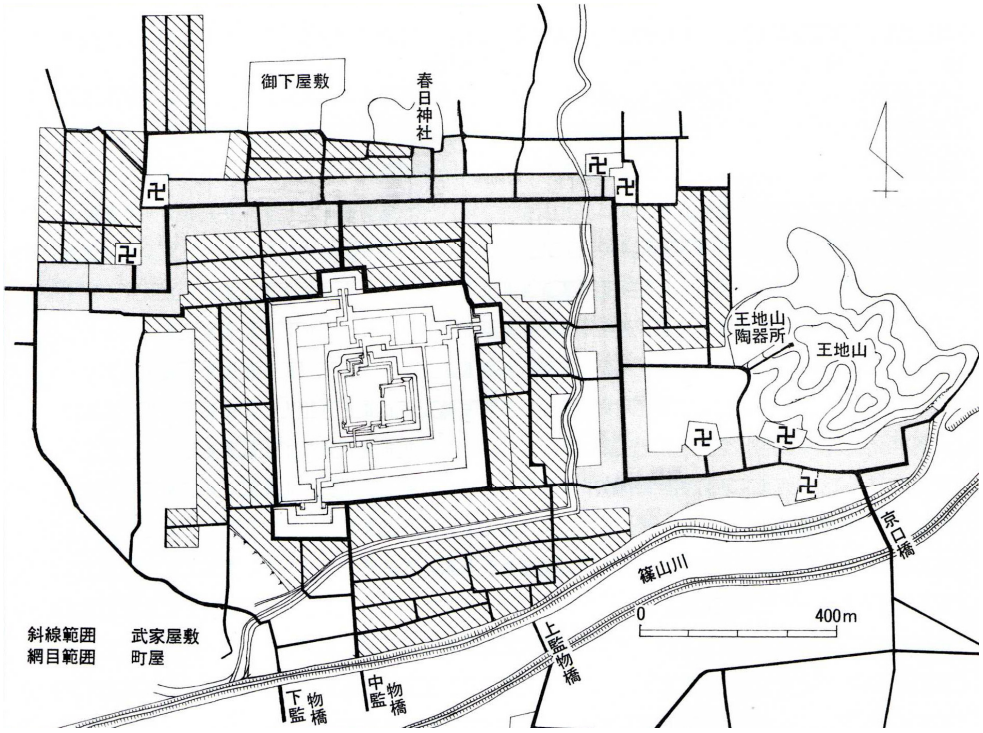

御下屋敷
春日神社
王地山陶器所
王地山
京口橋
篠山川
斜線範囲　武家屋敷
網目範囲　町屋
0
400m
上監物橋
中監物橋
下監物橋

図４

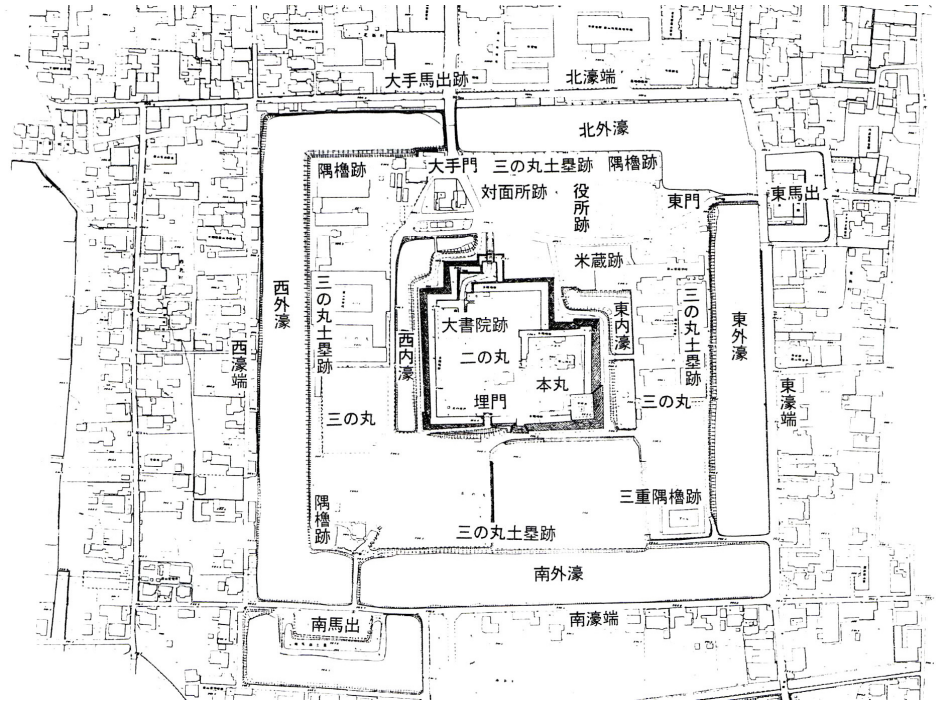

大手馬出跡
北濠端
北外濠
隅櫓跡
大手門
三の丸土塁跡
隅櫓跡
対面所跡
役所跡
東門
東馬出
米蔵跡
西外濠
三の丸土塁跡
大書院跡
東内濠
三の丸土塁跡
東外濠
西内濠
二の丸
西濠端
本丸
東濠端
三の丸
埋門
三の丸
三重隅櫓跡
隅櫓跡
三の丸土塁跡
南外濠
南馬出
南濠端

図５

丹波の城をめぐる
～篠山城跡と八上城跡～

高槻市立しろあと歴史館　　中西裕樹

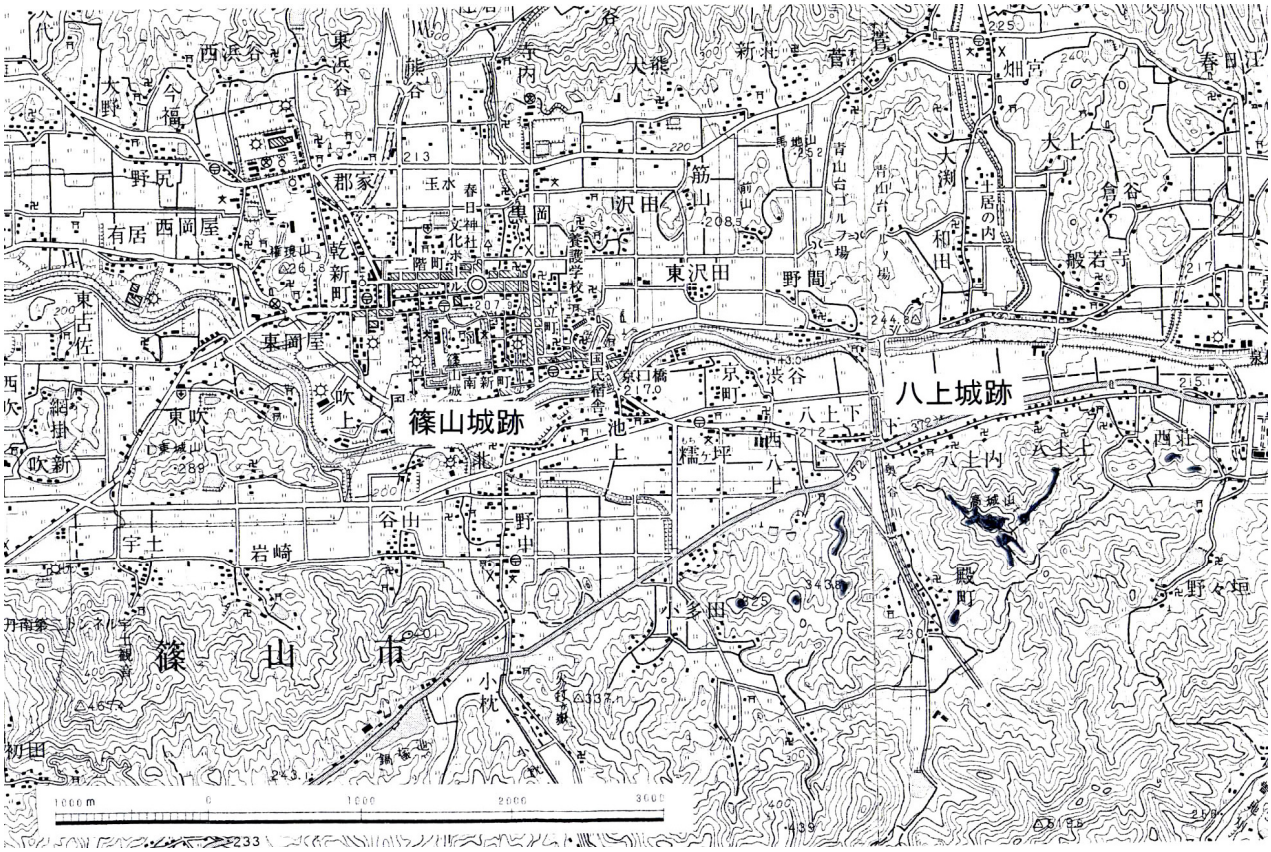
1　はじめに

兵庫県の篠山盆地に日本城郭史を飾る２つの城跡がある。八上城跡(兵庫県篠山市)と篠山城跡(同)である。

八上城は、戦国時代に波多野氏が拠った丹波屈指の規模をもつ典型的な山城である。長い戦国時代とそれに続く織田信長、豊臣秀吉による天下統一の時代、篠山周辺の中心城郭はこの城であり続けた。

しかし、徳川幕府が開幕し、いよいよ大坂城の豊臣家が滅ぼうとするとき、八上城は廃される。そして、徳川幕府が天下普請によって新たに築城したのが篠山城であった。そして、城の形はあたかも近世城郭の見本のような平山城となる。

この山城から平山城への交代は、単純に丹波で城が変わったというだけでなく、全国的な大きな時代の転換を端的に示している。城跡を歩いて立地を体感し、城のつくり方を目の辺りにすると、自ずとその理由は感じ取れるであろう。それでは、丹波が誇るこの２つの城跡を実際に見ていこう。



位置図（国土地理院発行 1/50,000「園部」「篠山」）に加筆

２　篠山城跡

篠山は山陰と京都、大坂をそれぞれ結ぶ街道が交わる場所である。篠山城跡は、慶長 14 年(1609)に徳川家康の命で築城され、約９ヶ月という短期間で完成をみた。

家康は関ヶ原合戦に勝利した後、大坂城にいる豊臣秀頼を封じ込める目的で、各地の城郭を整備した。篠山城もその一つであり、福島正則、蜂須賀至鎮ら豊臣系の諸大名を築城に動員した。また、築城の名手・藤堂高虎が縄張(設計)したことでも知られている。

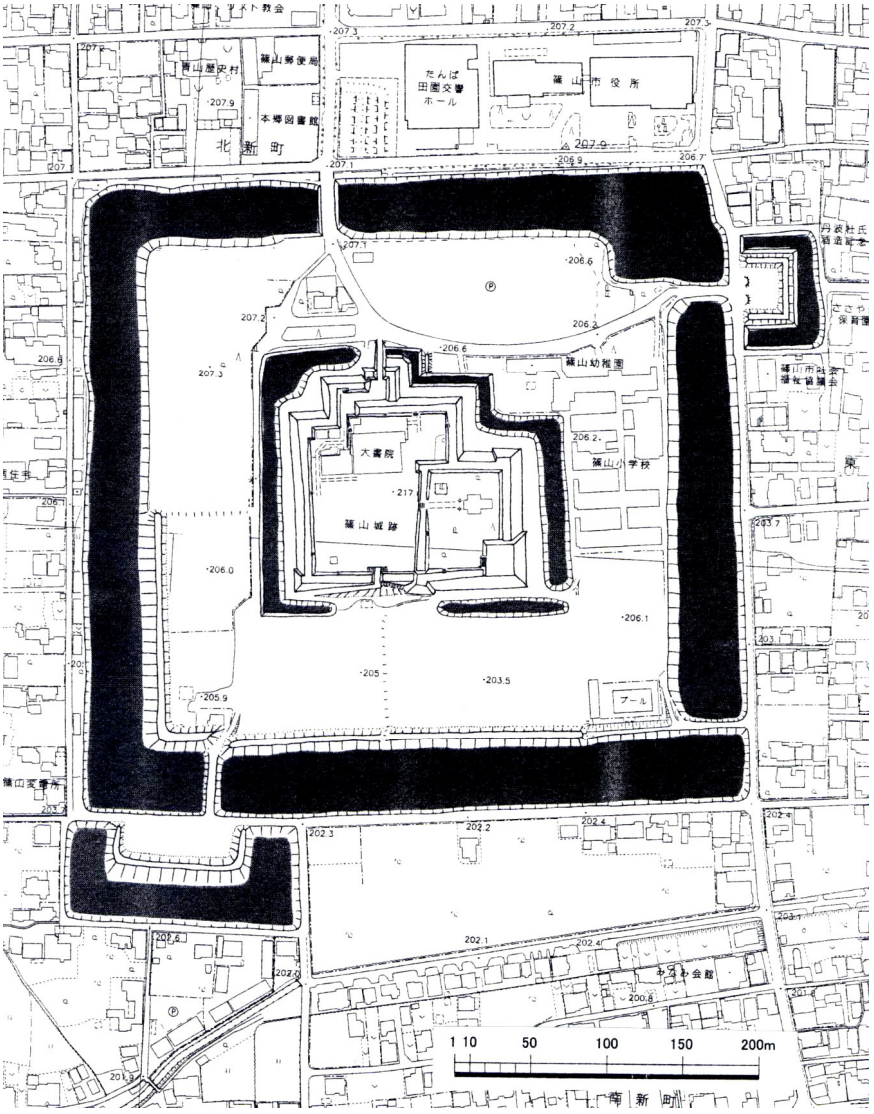
篠山城･二の丸の石垣と犬走り･水堀(奥の建物は大書院)

この城に入城したのが、八上城主であった松平(松井)康重である。以後、城主は藤井松平氏、形原松平氏、青山氏と変遷し、城は明治維新を迎えた。

篠山盆地の独立丘を利用した平山城であり、城郭部分の大きさは約 400ｍ四方である。この丘は笹山と呼ばれており、今でも元々の岩盤を確認することができる。現在、城跡は国指定史跡となり、古写真や発掘調査などに基づいて、二の丸大書院が復元されている。また、堀や石垣、土塁などの整備も進められており、完成が待たれる。

城の平面プランは、本丸(旧殿守丸)、二の丸(旧本丸)、三の丸(旧二の丸)、そして城下町が見事に同心円状となり、規格は方形に統一されている。

本丸には高石垣が構築され、天守こそ無かったが周囲には白亜の櫓をつなぐ多聞櫓が取り囲んだ。石垣の裾部には犬走りとともに狭い水堀がめぐる。敵には高石垣が高い壁となってそびえるため、幅広い水堀は不必要であったのかもしれない。



篠山城跡中心部概要図（中西作図）

東馬出と水堀

一方、三の丸は土造りで、周囲には土塁と幅広い水堀がまわる。この土塁のうえには屏風のような折塀が設けられていた。

城の見所としては、まず堅固な虎口があげられる。二の丸北側の鉄門は枡形が二重に重なり、三の丸との間には廊下橋を渡す。この部分は三の丸内部を石塁で仕切った広場となり、馬出の機能を兼ねる。大坂城などにも見られる技法である。

また、三の丸から城下町へ出る虎口は全て内側を枡形、水堀を渡った部分を馬出としており、その厳重さには目をみはる。現状で明確に残るのは石垣による東馬出、高土塁を持つ南馬出のみだが、今後三の丸の仕切りの石塁や枡形なども復元される予定である。

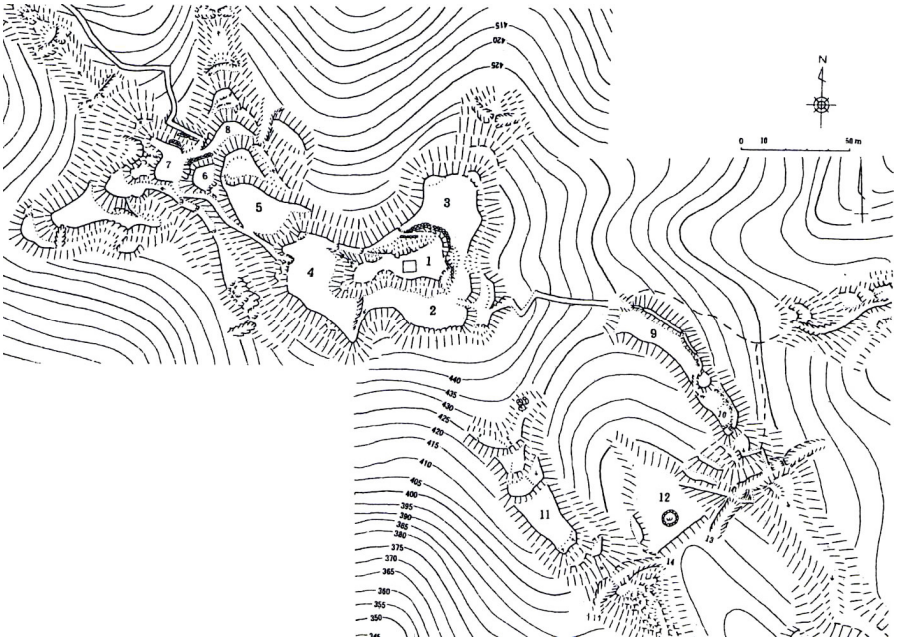
篠山城では規格化された縄張が貫徹し、機能がコンパクトにまとめられる。城下も整然とした屋敷割りがなされ、城の周囲に武家屋敷、その外側に町屋が設定された明快な構造になっていた。城の南東、山陰道に沿う町屋の一部は国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、今でも美しい河原町の妻入商家群などを楽しむことができる。

平山城という立地もあわせ、以上述べてきた点の全てが近世城郭と城下の教科書といわれる所以であり、一般的にイメージしやすい城下町そのものといえよう。城の構造とともに、城下の広がりも現地を歩くことでぜひ確認したい。

３　八上城跡

八上は、丹波・摂津国境の山並みと篠山盆地が接する場所にあたる。山裾には山陰道(京街道)が通過し、その前面に篠山川が流れる。この地には築城以前に丹波国多紀郡の郡代役所が設置され、郡内の年貢が集まり、市も開かれていた。

戦国時代の終わりごろ、丹波では波多野氏が地域の権力へと成長を遂げていた。波多野氏は、丹波などの守護をつとめた細川京兆家の被官として、戦国時代の初めに石見国（島根県）から丹波へと進出した新しい勢力である。波多野清秀、元清、秀忠、元秀、秀治らが代を重ねる中で勢力を伸ば



八上城中心部概要図（中西作図）

し、京都に進出するなど、戦国畿内の動向を左右することも再三であった。この波多野氏の本城が八上城である。

波多野氏は、たびたび三好長慶らの中央勢力に城を攻められたが、戦国時代の最後までここを守った。しかし、天正７年(1579)に織田信長の武将・明智光秀による大規模な攻城戦の末に滅ぼされる。この後、豊臣政権下において、城には前田玄以の子である茂勝が入り、関ヶ原合戦後の慶長 13 年(1608)に松平康重が最後の城主となった。

八上城は、丹波富士と呼ばれる円錐形の山容が美しい高城山(標高 462m)を利用した山城である。しかし、この山城のほか、周辺一帯には小規模な城館、砦が点在している。これらはひとつの城館群として把握すべきであり、その範囲は最大で 3.6km とも評価される。なお、かつてこの城館群には破壊の危機が訪れたが、近年には中心部が国指定史跡となった。

高城山の遺構がいわゆる八上城であるが、大きく城館群の遺構は、高城山と北側山裾の遺構、西側の「奥谷」という谷地形にある遺構、そしてこの谷を挟んだ向かいの「法光寺山」の遺構に分かれる。以下では、この順で簡単に紹介していく。

八上城は高城山山頂部を主郭とし、そこから延びる尾根上に削平地=曲輪を連ねる。土造りがベースとなるが、主郭北側の道の取り付き周辺には石垣が使用されている。また、北側山裾から高城山に道が取り付く「右衛門丸」周辺にも石垣が確認でき、これらは明智氏以降の改修部分ともいわれる。なお、「右衛門丸」は城内の道が集まる場になっており、八上城周辺の山城と共通する構造である。

主郭背後を下った「池番所」「蔵屋敷」という二本の尾根を利用した曲輪に挟まれた谷には「朝路池」という井戸がある。この水の手を守るように両脇の尾根には巨大な

八上城中心部の曲輪

堀切が設けられ、谷を挟んで一体化する。城の背後を守る最大の防御施設でもあり、その迫力には圧倒される。篠山周辺の山城では堀切が発達しており、八上城の堀切もその延長線上にあるものだろう。

高城山北裾には春日神社があり、現在登山道の入り口になっている。この一帯は「主膳屋敷」と呼ばれるように城主の居館であり、大振りの石材を用いた石垣の痕跡が残る。

「主膳屋敷」の名は前田主膳茂勝に由来するとされ、少なくとも豊臣期の段階でここが山城の居館になっていたことは確かであろう。その目の前には街道が走り、山裾周辺には家臣団の屋敷地と思しき多くの削平地を確認することもできる。ただし、町場を含めた実態はわからないことが多く、少なくとも篠山のような本格的な城下があったようにはみえない。

「奥谷」は、波多野氏が八上城を取り立てる以前からの本拠と考えられており、谷の小盆地内にある八上城へと続く丘には奥谷城という小規模な城館が設けられている。この一帯に波多野氏や家臣の一部が屋敷地などを構え、八上城整備の後も使用し続けていたと考えられている。なお、波多野氏が「主膳屋敷」の地を利用したのかどうかについては、よくわかっていない。

奥谷を挟んだ「法光寺山」には粗雑で小

篠山城跡からみた八上城跡（中央が高城山）

規模な山城が点在し、まとめて法光寺山城とも呼ばれる。これらは八上城と奥谷を本拠とする波多野氏の砦でもあり、逆に八上城を攻めた三好氏、明智氏の陣地としても利用された。明智氏による八上城攻めでは多くの陣所=陣城が構築されたことが知られ、法光寺山城以外にも遺構が残されている。

八上城についても、以上述べてきた点の全てが戦国時代を物語る山城の典型的な姿、むしろそれ以上の内容を持つといえる。また、堀切や城内の道のあり方など、周辺の他の山城との共通項も多い。規模も含め、まさに丹波を代表する戦国期山城といえるだろう。

４　おわりに

篠山城跡と八上城跡は、今でも互いにその姿が確認できる距離にある。篠山城は観光気分で楽しむことができ、八上城を訪れるには少し登山の心構えが必要である。また、探訪の際には周囲の風景も視野に入れたい。今でも町並みが広がる篠山城下と、いくらがんばっても同じ面積の平地が確保できない八上城下。その対比は明らかであろう。

この２つの城跡が連続した歴史的産物であることは驚きである。その背景には城下へ武士、商人らが住まなければならなくなったこと、そして多くの屋敷地が確保できる平地が城の周囲に必要になったこと、たとえ平地であっても高石垣や櫓、虎口により山城同様の防御が可能となる城郭が構築できるようになったこと、などなどが考えられる。

時代の流れが変わる瞬間を歩いて感じられるのが城跡であり、近世城郭と戦国期山城の代表が並び立つ篠山、さらには丹波の城の醍醐味でもある。篠山城跡と八上城跡から、さらに歴史の世界を広げることができるだろう。

講師プロフィール

芦　田　岩　男　　丹波市立植野記念美術館　係長・学芸員
　専門分野　　日本中世史・近世史、丹波の郷土史
　所属学会　　丹波史懇話会理事、神戸史学会
　著書･論文　　「ひょうごの城紀行」「丹南町史・上巻」「春日町誌・第4巻」
「兵庫県の歴史・第26号」「兵庫のしおり・第4号」

福　島　克　彦　　城郭談話会
　専門分野　　日本中世史、城郭史
　専門分野　　城郭談話会、日本史研究会
　著　　書　　「惣構の展開と御土居」
（仁木宏編『都市一前近代都市論の射程』青木書店 2002年）
「丹波波多野氏の基礎的考察」
（『歴史と神戸』216.219）など

高 雄 由 紀 子　　丹波市教育委員会　学芸員
　著　　書　　「柏原藩陣屋跡整備事業報告書」

山　上　雅　弘　　兵庫県立考古博物館 学芸員
　専門分野　　中世考古学
　所属学会　　城郭談話会
　著　　書　　「戦国時代の前半の中世城郭の構造と変遷」
（村田修三編『新視点 中世城郭研究論集』2002年）
「内場山城跡」「初田館跡」（兵庫県教育委員会編）

中　西　裕　樹　　高槻市立しろあと歴史館　主査
　専門分野　　日本中世史、城郭史
　所属学会　　城郭談話会、丹波史談会
　著　　書　　「畿内の都市と信長の城下町」
（仁木宏ほか編『信長の城下町』2008年）
「室町・戦国期の籾井氏について 丹波波多野氏被官小考」
（『丹波』7号 2005年）
「戦国期における地域の城館と守護公権」
（村田修三編『新視点 中世城郭研究論集』2002年）など

編集後記

「海外旅行に出かけて、その土地の文化を聞いたところ、逆にあなたの住んでいるところの文化は何かを問い返され､何も答えられず恥ずかしい思いをしたことがある｡これは、私に限らず多くの方が経験されていることではないでしょうか｡」先日、同行したふるさと文化賞表彰式上でのある来賓の方のあいさつの一節です。

外から情報を取り入れることも大切ですが、地域から情報を発信することも大切であることを示唆するものだと共感を覚えました。

平成 8 年度からスタートした講座「丹波学」は「地域の魅力再発見」をキーワードとし、文化の伝達・伝承・創造を目指した多くのファンをもつ事業です。

今年度は丹波篠山築城 400 年祭のプレ事業と位置づけ、「もう一度学びたい丹波の城～秘められた城主・人物伝」としました。

「もう一度学びたい」には、平成 15 年度の講座「丹波学」のテーマ『城から見た丹波の森』のリメイク版という意味が込められています。

また､今回は城を単に抜け殻の史跡としてではなく､かつて城主たちが自らの命を賭け、夢を託した存在としてアプローチするため、サブタイトルを「秘められた城主・人物伝」としました。

お城ファンである東京在住の方からも、旅先の駅で丹波学のちらしを見て大変興味をもったというお電話をいただくことができました。

今回、丹波学を担当して、まず丹波には確認されているだけで 186 の史跡があることを聴いて、一丹波市民として驚いた次第です。

平成 20 年度に改訂された学校教育の新学習指導要領に、伝統や文化に関する教育の充実が重要事項として盛り込まれました。

生涯学習の場から生まれた講座「丹波学」が学校教育の場に情報を発信することも新展開の一つとして期待できると思います。

この報告書が多くの方に利活用されることを願ってやみません。

平成20年度　講座「丹波学」報告書

平成21年3月31日発行

発　行　　(財) 兵庫丹波の森協会
丹波の森公苑　文化振興部

〒669-3309
兵庫県丹波市柏原町柏原5600
TEL　(0795)72-5170